

海老名市国分・上郷・河原口など

## 相模国分寺跡と海老名氏の遺跡を訪ねる

日時 2019年11月16日(土)

集合 茅ヶ崎駅改札前 8時50分

行程 茅ヶ崎駅—(相模線)—海老名駅下車—③国分寺—④海老名市温故館—⑤相模国分寺跡—⑥逆川と船付場跡—⑧相模国分尼寺跡—⑨大山道青山通り—(昼食)—⑪海老名氏記念碑—⑬御屋敷遺跡—⑭有鹿神社—⑮海老名氏霊堂—⑯厚木の渡し場跡—相模線厚木駅から茅ヶ崎駅へ：解散  
(上記のコースは途中の見学場所を略してあります。)

その他 資料代として会員200円、会員外300円を集めます。



— 連絡 — 山本俊雄 090-6174-2806 尾高忠昭 090-3241-0775 平野文明 090-8173-8845

会員募集中

(8~16 頁は最終頁から読んで下さい)

### ①海老名中央公園の七重の塔

建物に挟まれた中央公園に朱塗りの塔が建っている。説明板に次のように記されている。

「故大岡實氏の復元図を基に相模国分寺の塔を、実物大の約三分の一のスケールで建設した。

2 回行われた発掘調査により、塔の基壇は一辺 20.4 ㍎、高さは 1.3 ㍎、現存する礎石から塔の初重の広さは 10.8 平方㍎、塔の高さは 65 ㍎と推定されている。

発掘された石敷や盛り土から 2 回の修理もしくは立て替えが行われたことが分かっている。」(要約)

### ②海老名の大けやき (神奈川県指定天然記念物)

説明板に次のように記されている。

「船つなぎ用の杭として打ったものが発芽して大きくなったと伝えられている。根回り 15.3 ㍎、樹高 20 ㍎。昭和 29 年 3 月 29 日指定」(要約)

今は傷んでいて樹高も説明板の数値とは違っている。

『ウォーキングガイドブック海老名文化財散歩—自然と歴史のさんぽみち』(海老名市教育委員会平成 18 年刊 次からは『海老名文化財散歩』と略記) 23 頁』には「杭が根付いたので 逆さケヤキ ともよばれる」とある。

### ③国分寺 (高野山真言宗) 海老名市国分南 1-25-38

『海老名文化財散歩』33 頁に次のように記されている。

「本尊は薬師三尊像で、中尊の木造薬師如来立像は、作風から室町時代南北朝期 (14 世紀後半) 造立と考えられている。脇侍の日光菩薩立像は室町時代中期 (15 世紀頃)、月光菩薩立像は室町時代後期 (16 世紀頃) の作風と考えられている。本尊の眷属として木造十二神将立像があり、貞享 4 年 (1687) に色彩された記録があることや作風から江戸時代前期に室町時代の作風に習ってつくられたとされている。

また平安時代から鎌倉時代の作風を模して江戸時代前期に造立されたと考えられる木造不動明王坐像、享保 20 年 (1735) 造立の木造大黒天立像が安置されている。

天平 13 年 (741) のいわゆる「国分寺建立の詔」により創建された相模国分寺の法灯を継ぐ市内屈指の古刹。平安時代中期頃に史跡相模国分寺跡の場所から上の台に移り、江戸時代頃までに現在の位置に移ったと考えられている。」

### 国指定重要文化財 銅鐘

同書同頁に「境内にある。海老名氏の一族、国分季頼 (源季頼) が承応 5 年 (1292) に国分尼寺に寄進したもの。作者は、銘文から鎌倉円覚寺や金沢の称名寺などの梵鐘を手がけた名工、物部国光とされている。」(要約)と記されている。

なお、銅鐘の銘文は『新編相模国風土記稿』(次から『新編相模』と略称) 国分村、国分寺に記載されている (本誌 8 頁)。

境内に屋根を付けて囲った一角があり、庚申塔・如意輪観音坐像・新しい石造の如来坐像が置かれている。またそれらの前に「天明五年 (1785) 乙巳六月吉日」の銘を持つ手水鉢が置いてあり、この一角を「尼のなき水」と表示してある。海老名市温故館で配布しているカード版の「えびなむかしばなし」に尼の泣き水の伝説が次のように記載され

ている。

「**尼の泣き水** いまから千二百年もの遠い昔のお話しです。天平 13 年、聖武天皇は、人々の平和な生活を願って、国ごとに国分寺と国分尼寺を建てよう命じました。相模の国では、海老名がよい土地であったのでここに建てられることになりました。やがて、天をつくような七重塔を始めとした国分寺ができ、そこから北 500 メートルほど離れた場所に国分尼寺が出来ました。

そのころ、国分寺の下を流れる相模川で、魚を取って暮らしていた若い漁師がいました。その漁師はいつしか国分尼寺の尼さんと知り合い、たがいに愛し合うようになりました。

尼さんは結婚が禁じられていましたので、二人はみんなに見つからないようにひっそりと会っていました。ある日のこと、若者がだまりこくって困った顔をしているので、尼さんは「どうしたのですか。何か心配ごとでもあるのですか」とたずねました。若者はなかなか口を開けなかったのですが、やがて決心し「じつは、国分寺があまりにまぶしく輝くので魚が遠くへ逃げてしまい、漁をしても魚がとれないのです。それで困っているのです。あの国分寺さえなければ…」と涙を話しました。尼さんもどうすることもできないので、だまってしまい、二人はさびしそうにその場は分かれていきました。

その夜のことで。「火事だー 火事だー 国分寺が燃えて居るぞー」

漁師のことを思うあまりに尼さんが国分寺に火をつけたのです。一度燃え始めた国分寺は、消すこともできず、一晩のうちに焼けてなくなりました。

尼さんはとらえられ岡の上に生き埋めにされ、のこぎり引きの刑になってしまいました。

その後、不思議なことに、その場所から一滴、二滴とわき水が流れ出てきました。村人は尼さんが罪をわびて流している涙だといって、そのわき水を「尼のなき水」と呼びました。

尼さんがおしおきされた丘は、現在海老名小学校の上の台地です。尼のなき水は、昭和 40 年ころまで流れ出ていましたが、まわりに家ができたりしたので、いつとなく枯れてしまいました。(こどもえびなむかしばなし第 1 集より)」

この話は『新編相模』の国分村の最後にも掲載されている(本誌 8 頁)。

#### ④海老名市温故館 海老名市国分南 1 丁目 6-36

『海老名文化財散歩』22 頁。

「相模国分寺跡が国指定史跡となった大正 10 年(1921)に、海老名小学校の校庭に建てられた遺跡陳列館が始まり。昭和 57 年(1982)に海老名市立郷土資料館として開設され、考古・歴史・民俗資料を収蔵、展示している。

温故館の建物は、大正 7 年(1918)に海老名村役場として建築されたもので、当時よく採用された郡役所様式により作られている。平成元年度(1988)に『かながわ建築物 100 選』に選ばれた。」

#### ⑤相模国分寺跡 (国指定史跡) 海老名市国分南 1 丁目-19

史跡として整備されている。『海老名文化財散歩』23 頁に次のように記されている。

「相模国分寺は天平 13 年(741)の国分寺建立の詔によって建立された。例の少ない法隆寺式伽藍配置で、南北 300 尺、東西 240 尺の寺域があったことが発掘調査で分かった。

塔・金堂・講堂跡には礎石と基壇が残り、北・南回廊、僧坊、鐘楼、経蔵などの跡や

大型建物跡などが確認された。塔跡（推定高さ 65 尺）や金堂・講堂跡（東西 40 尺、南北 31 尺）の基壇規模は諸国の国分寺の中で最大級である。

創建年代は、出土した瓦の分析や発掘で得られた資料から 8 世紀中頃に完成されたと考えられている。

『新編相模国風土記稿』にも記載されるほど古くから知られている。大正 10 年(1921)に国指定史跡になった。現在は塔基壇などが復元整備されている。」(要約)

## ⑥逆川跡と船着場跡

『海老名文化財散歩』21 頁。

「逆川（さかさがわ）は人工の水路といわれ、市立杉本小学校の辺りから、目久尻川の水を取り入れ、伊勢山の南側を回って国分の台地を経て、国分尼寺の小谷戸から海老名耕地に流れていた。後に現在の相模鉄道の手前で西に流路が変更され、新堀と呼ばれるようになった。

発掘調査により、平安時代以前に作られ、船着場と推定されるような遺構も確認されていることから運河跡ではないかといわれている。国分付近では南から北へ、目久尻川流域の低地から台地上へ流れていることから逆川と呼ばれるようになったとされている。

昭和 40 年代までは流れていたが、次第に埋め立てられ、ごく一部の地形にその面影を見ることができる。川が北へ曲がっている地点に由来と地図を刻んだ記念碑がある。」

## ⑦石橋供養塔

『海老名文化財散歩』21 頁。

「宝暦年間の頃(1751~64)、国分の谷戸に重田七三郎という翁がいた。目久尻川を望地から国分に渡る木橋が朽ちて旅人が難儀しているのを見かねて石橋を架けようと「望地村・国分村石橋勧進帳」で浄財を募った。そのかいあって、石橋が完成し、翁の永眠後 27 回忌に、国分村の名主 忠兵衛が供養塔を建てたと伝えられている。この塔は今は残っていないが、平成元年(1813)の目久尻川護岸工事中に石橋供養塔が発見された。しかし、これは文化 10 年(1813)に再建されたものである。石橋供養塔は矢倉沢往還の道筋を示し、また翁の義挙を伝えている。」

## ⑧相模国分尼寺跡（国指定史跡） 海老名市国分北二丁目 6-27

『海老名文化財散歩』29 頁。

「天平 13 年(741)の国分寺建立の詔によって建立された寺院。発掘調査によって金堂跡、経蔵跡、回廊跡などが見つかっている。出土した瓦などから 8 世紀後半に完成したと考えられている。『新編相模国風土記稿』にも記載されている。金堂跡などの保存状態が良好であったため、平成 9 年(1997)に国指定史跡になった。」(要約)

## ⑨大山道青山通り

『海老名文化財散歩』9 頁。

「江戸時代は大山詣りが盛んで市内に大山道が多く通っていた。

江戸の赤坂御門から青山、多摩川、長津田、鶴間を通り、市内の柏ヶ谷、国分、河原口を通過して相模川を越え厚木市に渡り、伊勢原市の大山までの道が大山道青山通りと呼ばれていた。

この道はさらに西に延びて、善波峠（伊勢原市と秦野市の境）を越えて、秦野市、松田町、矢倉沢の関所、足柄峠を通過し御殿場から沼津に続き東海道につながる。古代から使われた道で、矢倉沢往還とも呼ばれる。」（要約）

### ⑩地名の「大縄(おおなわ)」

海老名駅の南側一帯はかつては広大な水田で、「一大縄」などの小字がついていた。今は開発されてその面影はない。『海老名文化財散歩』24頁に次のように記されている。

「海老名耕地から有馬耕地にかけての水田地帯には大規模な方形の区画割りがあり、現在でもあぜ道や道路にその痕跡や「一大縄」～「五大縄」の地名が残っている。この区画割りは、奈良時代の班田収授に基づく口分田のためのものという説がある。しかし、四大縄遺跡で発掘調査が行われ、鎌倉時代から江戸時代の水田は見つかったが、奈良～平安時代のそれは見つからなかった。」（要約）

### ⑪海老名氏記念碑(上郷遺跡)

住宅の一角が囲ってあり、記念碑、新しい五輪塔、板碑、寄進者の名前を記した碑が植木の中に立っている。『海老名文化財散歩』42頁に次のように記してある。

「上郷遺跡は畑の耕作中に偶然発見された。発掘調査により五輪塔や板碑、集石遺構が確認された。板碑は室町時代の年号が彫られたものが大半を占めており、宝樹寺跡の存在から、この地を治めた海老名氏に関係する墓地ではないかと考えられている。また、道を挟んだ南側には海老名氏の記念碑がある。」

### ⑫水道みち

（カード版「えびなむかしばなし」に次のように記されている。

「**横須賀水道** 愛川町と横須賀市を結ぶ全長53キロメートルの上水道。大正10年(1921)に全面が完成した。市内は、上郷から海老名耕地を横切り、大谷の大地を上り綾瀬市へと抜けている。

当時の日本海軍は、世界列強との軍艦の建艦競争に躍起となっていた。この軍艦を造っている横須賀海軍工廠では、スクリー軸の冷却水や焼き入れに必要な良質の水が不足し、また艦艇出航の際に積載する飲料水も、横須賀市民との配分に苦慮していた。そこで海軍省は、良質の水を大量に供給できる水源地を愛川町の半原に求め、半原と横須賀を結ぶ直線を県央に一本、「グイ！」と引いた。それが横須賀海軍水道で、現在の横須賀水道。「水道みち」とも呼ばれている。

時を移さず測量が始まり、あとは山も川も野も池もおかまいなしで、お宮もお寺もそのけそこのけで、墓地も史跡も踏みつぶしての突貫工事だった。相模川を渡る水道橋も、有鹿神社裏の水の勢いの激しい場所で、しかも川幅の特に広い場所を避けもせずに無理やり押し切った。（こどもえびなむかしばなし第3集より）」（一部改変）

現地の道路になっているその両側に、高さ3～40センチのモルタル造りの杭が打ってあって「水道部」と刻されている。

### ⑬御屋敷遺跡 海老名市河原口三丁目28付近

『海老名文化財散歩』42頁。

「御屋敷・屋島などの字名（あざめい）から、中世にこの地に本拠地を置いた海老名氏の居館跡があるのではないかと考えられている。しかし発掘調査では今のところ江戸時

代の遺跡しか見つかっていない。高木清秀の屋敷があった場所という説もある。」(要約)

高木清秀は徳川家康に仕え、江戸時代初期に海老名に居を構えたと伝えられている。

#### ⑭有鹿神社(あるかじんじゃ) 海老名市上郷一丁目 4-41

『海老名文化財散歩』42頁。

「祭神は大日靈貴命＝天照大神。鳩川が相模川に流れ込む地点に鎮座する。平安時代中期の「延喜式」神名帳に記載されている相模十三社の一つ。江戸時代には海老名五ヶ村(河原口村・上郷村・中野村・中新田村・社家村)の総鎮守だった。創建時期は不明だが、永和3年(1377)の作成とされる「有鹿明神縁起」では、神亀3年(726)に存在し、天平宝字元年(757)に海老名郷司藤原広政が中心となって再建、鎌倉幕府滅亡時に兵火にかかり本殿以外の建物が失われたとしている。

本殿と拝殿の天井画は海老名市指定重要文化財となっている。また境内には生い茂る社叢がある。

**有鹿神社本殿** 大型の一間社流造で、内部は前後二室に分かれ、前室は正面扉口のほかに両側面に一本引きの建具を入れることや、特徴ある向拝の造りなど珍しい造りである。肘木は鋭い鋸(しのぎ)を持つ絵様肘木。建築年代は、虹梁の絵様などの意匠から18世紀中頃と考えられている。

有鹿神社拝殿天井 龍の絵図(海老名市指定重要文化財) 大住郡坪の内村の絵師、近藤如水(藤原隆秀)が画いた。諸国遍歴から帰郷した後の嘉永2年(1849)頃の作とされている。

**有鹿遺跡** 有鹿神社一帯が遺跡で、弥生時代から中世の遺物や遺構が確認されている。」

なお、有鹿神社の江戸時代の別当寺は総持院である(『新編相模』河原口村有鹿神社の項)。

また、カード版「えびなむかしばなし」には次の二つの伝説が記されている。

「**有鹿谷の霊石** 有鹿郷五ヶ村といわれた上郷(かみごう)、河原口、中新田、社家、中野の農業用水は、その水源が相模原市勝坂にあります。この勝坂の水源にはこんな話があります。

今から約四百年前、総持院に慶雄(けいゆう)というお坊さんがいました。ある晩、神霊が慶雄の夢の中に現れて、「よい水源を教えるから、明日の朝、境内から飛び立つ白鳥(しらとり)の後を追え」と言いました。この鳥は白い鳥であったとも、金色の鳥であったともいわれていますが、翌朝、この鳥は慶雄を北へ北へと導いて、磯部村勝坂の集落で姿を消しました。

そこには洞窟があり、清水がこんこんと湧き出ていたので、此处を有鹿谷(あるかたに)と名づけ、有鹿郷五ヶ村の水源としました。それからは毎年4月8日の祭礼には、有鹿神社のみこしがこの有鹿谷まで行き、6月14日まで、ご神体を洞窟においておくことがしきたりとなりました。このしきたりは「有鹿様の水もらい」と言われました。」

勝坂のお年寄りの話では、ご神体はきれいな玉石ですが、不思議なことに、子どもたちがいたずらをしてそれを動かすと、いつの間にか必ず元の位置に戻っていたということです。(以下略)(こどもえびなむかしばなし第2集より)」

「**有鹿姫**(あるかひめ) 今から約五百年前、愛川の小沢(こさわ)というところに金

子掃部助（かもんのすけ）という武将がいました。金子掃部助は、関東管領 山ノ内上杉家の家来、長尾景春が起こした戦に加わりましたが、武運つたなく破れ、小沢城を捨てて敗走しました。

この掃部助と奥方の間には、美しい姫君がいました。姫は早くから有鹿の地、すなわち海老名の河原口に住んでいた郷士の青年と婚約中で河原口にある海老名館に来ていましたが「小沢城危うし！」といううわさに、急いで小沢に戻りました。

しかし、時すでに遅く、父は戦死、母は行方知れずと聞き、すっかり生きる望みを失いました。覚悟を決めた姫は、見苦しい姿を人目にさらしたくないと、薄化粧をして、まだ燃えている小沢城を後に、天に向かって手を合わせると、ざぶん！と相模川に身を投げたのでした。

するとどうでしょう、美しかった姫の体は、たちまち恐ろしい大蛇に変わり、大きくうねりながら下流に向かって泳ぎ出しました。途中、六倉（むつくら）という所で大きく身震いすると、相模川の水が舞い上がり、中津の原に大きな水たまりができました。

さらに水しぶきを上げながら進み、河原口に近づくと、姫は再び人間の姿に戻り、息絶えて有鹿神社裏の河原に打ち上げられました。

神社の氏子らは、海老名の地に嫁ぐ日を夢見ていた姫の死を悲しみ、せめてもにと「有鹿姫」の名を贈り、神社の片隅に、そのなきがらを葬りました。現在、有鹿神社と有鹿小学校の間には、若くして散った有鹿姫をしのぶ碑が建てられています。（こどもえびなむかしばなし第4集より）」

#### ⑮海老名氏霊堂 海老名市河原口三町目 8 付近

『海老名文化財散歩』44 頁。

「海老名氏は、源有兼が永久元年(1113)から4年間、相模守として在任したとき、武蔵国と相模国にまたがる武士団の横山氏（横山党）の女性と婚姻関係を結び、そこに生まれた季兼が在地名の海老名氏を名乗ったのに始まるとされている。海老名氏は吾妻鏡や曾我物語、保元物語に登場する。のちに本間氏、国分氏、下海老名氏、荻野氏などの分家を出す。和田義盛の乱（建暦3年：1213）に和田方について敗北し、勢力をそがれ、また永享の乱（永享10年：1438）で足利持氏方についたために本家は滅んだとされている。」

現地立つ説明板には次のように記されている。

「海老名氏の菩提寺は、現在は廃寺の宝樹寺と伝えられ、その跡地が霊堂のあるこの辺り帯と考えられる。霊堂の堂内には海老名氏ゆかりの物と伝わる宝篋印塔や五輪塔が安置されている。霊堂周辺の河原口坊中（ぼうじゅう）遺跡からは12～14世紀の建物跡やかわらけなどが多く出土し、宝樹寺の存在と合わせて、この辺り帯が海老名氏の本拠地だったと考えられる。」（要約）

#### ⑯厚木の渡し場跡

『海老名文化財散歩』45 頁。

「大山道の一つ青山道（矢倉沢往還）には厚木の渡しが設けられていた。渡辺華山もこの道を通り『游相日記』に厚木の渡しのことを記している。安政5年(1858)の『渡船場賃銭心得之覚』には『荷掛り拾八文 人拾二文 馬拾八文』とある。」

今、現地に行っても当時をしのぶ手がかりは何もない。

く有力な神社の神霊に託したものとえよう。用水の問題は、磯部村・新戸村(現相模原市)・座間の各村(現座間市)などにとっても死活問題であったため、正徳五年(一七一五)および宝暦二年(一七六二)たびたび出入があったことが知られている。正徳五年「磯部村内勝坂有鹿神社地出入書物」・宝暦二年「海老名村有鹿神社出入控帳」相模原市福田文書)。

河原口村 ④海老名市河原口・さつき町

相模川の東にあり、東は国分村・上大谷村、南は中新田村、北は上之郷村と接している。西は相模川を隔てて愛甲郡厚木村・金田村(現厚木市)・村内を矢倉沢往還が東西に、八王子道が南北に通る。

中世は海老名郷五カ村(「風土記稿」によれば、当村のほか上之郷・中野・中新田・社家の四村)の一つ。なお門沢橋村を入れて六カ村とする説もある。海老名郷は鎌倉時代後出の季景の三代前に上下に分れたらしく(小野系図、海老名氏による下海老名郷の相伝が知られる。文永元年(一二六四)八月二日海老名季景は三郎季直に「下海老名郷内在家志宇」・「田志町参段小」を譲った(「沙弥仏然海老名季景譲状」(県史二)。季直は弘安九年(一一八六)十一月二三日幕府の安堵を得ている(「関東安堵下知状案」(県史二)。建武元年(一一三三)四月二日海老名通貞は嫡子尊南丸に「下海老名か」の知行分を譲った(「海老名通貞譲状案」(県史三)。応永九年(一四〇二)十一月七日三島神社(鶴岡八幡宮末社)の神主大伴時連が「下海老名郷領家職」を鎌倉府より安堵されている(「相模守三浦高連行状写」同書)。なお上海老名郷、および上下を合せて呼称したと思われる海老名郷に関して不詳。享徳四年(一四五五)二月付筑波潤朝軍忠状写(同書)には「八月十五日(中略)其後海老名御陣江参、從御所中」とあり、永享一〇年(一四三八)の永享の乱に際し、足利持氏がこの地に在陣したことが知られる。小田原衆所領役帳には山中内匠助「貳百六拾八貫四百廿三文 海老名」、山中孫七郎「貳百五拾三貫百五拾五文 海老名」とある。

近世は、万治二年(一六五九)までは幕府直轄領。以後、貞享元年(一六八四)まで久世(のち下総関宿藩)領と相給。元禄一年(一六九八)以後は三枝氏ら旗本四氏領の相給となる。東海道宿村大概帳には、馬入川相模川大助郷九村のなかに記され「右九ヶ村より平田船四艘差出来」とある。天保九年(一八三八)の相州青山往還宿々控帳(県史九)には「大久保出雲守様計、妻田村迄御継立仕候、道法式拾五町、賃銭拾八文」とあり、狹野山中藩主通行の時に限って継立を勤めた。また「たひ人足継計之所、当年は馬継迄相勤申候、往還道相勤不申候」とある。「風土記稿」には、当村と中新田村・厚木村の持船五艘を置き、相模川の往来の人利用されたところ。天保初期の家数六三二風土記稿。天保一年の高七三二石余、家数五九とある。内訳は旗本永田領一一七・四七六石、家数一二、旗本辻領三一八・八〇六石、家数二九、旗本松平領一八三・七三三石、家数一二、旗本三枝領一一・六〇七石、家数六(「相模国寄場組合村高家数明細帳」(県史八付録)。式内内鹿神社は当村にあったが、現在は旧上之郷村域となっている。高野山真言宗総持院は満蔵寺と号し、もと有鹿神社の別当寺。天正三年(一五七五)九月に出された相模国諸真言宗法度(県史三)の宛先七カ寺の一つにみえる。同一九年寺領一〇石の朱印を与えられた。同宗宝樹寺、曹洞宗宗珪寺も慶安二年(一六四九)それぞれ七石と二石の朱印を与えられているが、宝樹寺は明治初年暴風により倒壊、総持院に合された。ほかに曹洞宗安養院がある(風土記稿)。大正一五年(一九二六)神中鉄道(現相模鉄道)の厚木駅が開設されたが、昭和二年(一九二七)小田急電鉄河原口駅となり、さらに同一九年厚木駅に改名された。

『新編相模国風土記稿』 第三卷327頁 雄山閣版

大日本國相州國分尼寺槌鐘

大檀那源季頼

夫以當寺者、維聖武皇帝之御願、醫王善逝之聖跡也、鐘磬者、亦佛閣住持之莊嚴、魔界降伏之形聲歟、爰逸韻絶而效久、樓臺荒而陽積乏縁之鼓之、凡厥所祈者、天下靜謐國土豐饒矣、所仰者、伽藍繁昌子孫泰平焉、乃至法界平等利益無邊而已、

正應五年 歲次 丙辰 十月六日

平氏女

源氏女

源季久

大工 大和權守物部國光作

一聽鐘聲 當願衆生 脫三界苦 得證菩提

按ずるに、源季頼が事、寺傳を失ひ、呼名も亦傳へず、然るに近郷に海老名あり、源平合戦の間、海老名源八季貞、當國の住人として著名なり、季頼季久皆季の字を以て名付る時は、海老名氏の末派なること論なし、

『新編相模国風土記稿』 第三卷三二八頁 雄山閣版

○涎泣水 今少許の水澤なり、國分寺の東南三町を隔つ傍三杉樹立り、相傳ふ古昔蟹ありて業の妨となるを以尼寺伽藍に放火す、依て此所にて死に處せらる、故に此名有と云、或云尼寺の尼恨事有て放火すとも云、此所除地にて國分寺に屬す、



る。この「国分仁寺」とは当寺のことであろう。

現在は金堂跡と伝える礎石をもった基壇が住宅の立並んだ間にわずかに残されているだけである。大正時代までは、この付近に土壇の名残と大きな礎石が残されていたといわれ、礎石の一つは近くの龍峰寺境内の忠魂碑の下に移したという。正式な調査がなされていないために、寺の伽藍配置・規模・内容など不明な点が多い。付近には尼寺・尼寺ヶ原・築地際などの地名を伝え、寺との関連が想像される。

瓢箪塚古墳 ④海老名市国分

国分寺跡南方七〇メートル、ひょうたん山公園にある。前方部を南に向けた柄鏡式の前方後円墳で、全長約六メートル。発掘調査は行われていないが、形状からみて築造年代は秋葉山古墳群より古いと思われる。かつて相模国造の墓であろうと推定されたが、秋葉山古墳群の被葬者を含めて、おそらく、五世紀から六世紀にわたって相模川流域を支配した豪族の歴代の墳墓であろうと推定される。

上之郷村 ④海老名市上郷

相模川の東にあり、東は国分村、南は河原口村、北は上今泉村・下今泉村、四谷村(現座間市)と接しており、西は相模川を隔てて愛甲郡金田村・下依知村(現厚木市)と面している。また村を東西に矢倉沢往還、南北に八王子道が通じている。中世は海老名郷五カ村の一つ。正保国絵図には「上海老名」、元禄国絵図には「海老名上之郷村」とあり、元禄郷帳には「海老名・古者上村上之郷村」とある。

近世は、寛永一七年(一六四〇)まで幕府直轄領、以後旗本秋元領との相給。幕府直轄領は万治二年(一六五九)から貞享元年(一六八四)の間、久世(のち下総関宿藩)領となり、元禄一〇年(一六九七)旗本三氏に分れる。天明八年(一七八八)六月の村明細帳(県史八)によれば支配別高・反別は、旗本秋元領が四四九・五一石、田三三町三反余、畑一三

町九反余。他の旗本森川・高木・戸田領はそれぞれ九六・三九六石、田六町九反余、畑四町四反余。家数七一。用水は磯部村(現相模原市)からの流れと鳩川の水を今泉村板戸で堰を造り引き来る。この用水を利用する当村と下流の河原口・中新田・社家・中野の五村は、毎年四、五度ずつ掘浚った。田畑の肥料には糠・干鰯を用いたが、そうした買物は愛甲郡厚木村(現厚木市)で調えた。田畑買入の値段は一反につき、田は三兩二分ぐらい、畑は二兩二分ぐらいであった。御鷹御捉飼場があり、鷹匠が村で宿泊の時は人馬を差出した。朝鮮・琉球の使節通過の時は馬入川の船橋役、藤沢宿への人馬差出しが命ぜられた。

また享保一三年(一七二八)片瀬(現藤沢市)から茅ヶ崎海岸にかけて幕府の大筒射場が開かれると、その演習の際には藤沢宿の鉄砲御用人足役を勤めた。

これらの負担に対し、嘉永五年(一八五二)一〇月助郷免除願を提出している。その中で徳川家康の柩が駿河久能山から下野日光山に向かう途中、当村で休んだため外記宿の名が与えられ、その由緒によりこれまでいずれの宿にも代助郷・加助郷を勤めず済んだと述べている。「風土記稿」「相中留恩記略」によれば、この外記宿は四谷村との境にある。昔は地続きで民家も一八戸あったが、一度の相模川の氾濫により流失して飛地となり、今は三軒残るにすぎないとある。前記村明細帳にも「水損勝之村」とし、秣場・地頭林もあったが川欠けになったと記している。

天保初期の家数は六三(風土記稿)。天保一一年(一八四〇)の家数四六(相模国寄場組合村高家数明細帳 県史八付録)。曹洞宗龍昌院がある。この地域に昭和一六年(一九四一)に小田急電鉄の海老名駅が開設された。

上郷中世墓地 ④海老名市上郷

有鹿神社の東方約二〇メートルの地点、字下郷地域は、昭和一九年(一九四四)頃の農業用水工事のとき以来幾度か中世供養塔類が発見され注目されてきた。同五一年

再び前記地点の南、上郷小字御屋敷に供養塔類の埋没していることがわかり、調査された。調査は約六〇平方メートルの狭い範囲ではあったが、ほぼ全面に河原石を敷きつめた中世墓地が発見された。各所に五輪塔・板碑の断欠が散乱していた。それはまた、盗掘が繰返されてまったく荒れ果ててしまったとも考えられた。遺跡全面には火葬骨が散乱していた。このような状況のなかで、火葬を行った場所、板碑を建て並べ埋葬した場所、一字一石経を埋納したと考えられる細礫の集積されたものなどが発見された。遺物としてはあまりみるべきものはなく、わずかに納骨壺と考えられる陶器の破片ばかりで、ほかには古銭(宋銭)がいくつか発見された。六道銭の風習がうかがわれた。時期は板碑の刻名によって南北朝から室町初期と考えられる。しかし、以前から採集されているものから判断すると鎌倉後期から室町中期にかけて営まれたものであろう。

有鹿神社 ④海老名市上郷

鳩川が相模川に流入する所に近い左岸微高地にある。祭神は大日靈貴命。旧郷社。「風土記稿」によれば、当時は河原口村にあった。「延喜式」神名帳に「有鹿神社」とある。鎮座の年代は不詳であるが、「三代実録」貞観一一年(八六九)一月一九日条に「授相模国従五位下有鹿神社五位上」とある。

統縁起によると、天正三年(一五七五)別当総持院住職慶雄が夢中に神霊の告げがあり、瑞鳥の飛ぶあとを北に追っていたところ、磯部村(現相模原市)の勝坂という集落に洞があり、清水が湧き出るため有鹿谷と名付けたという。これより毎年四月八日の祭礼には、神輿が有鹿谷まで行き、六月一四日帰座するのが通例となった。この神事を「有鹿さまの水もらい」という。有鹿神社は海老名郷五カ村の総鎮守であるから、この神事は四月八日から六月一四日までという最も用水の必要な時期に、これらの村々の耕地の水利権確保を有鹿神社という古代から統

たしたものと推定される。

弘仁一〇年(八一二年)二月一日と八月二九日の二度にわたり火災にみまわれている(類聚国史)。「三代実録」元慶二年(八七八)九月二九日条によれば、相模・武蔵を中心とした関東地方に大地震が起き、同書同五年一〇月三日条によれば、「国分寺金色薬師丈六像一体、挾侍菩薩像二体」が破壊され、その直後の失火により焼損した。相模国は仏像などの改造を申請し許可されている。「日本紀略」天慶三年(九四〇)一〇月二七日条では、去る八月一〇日に当寺の仏が雨のように汗を流したと報告されている。「吾妻鏡」文治二年(一一八〇)五月二九日条によれば、源頼朝は東海道諸国の国分寺などを修造するため、守護人にその破壊状態を注進させている。建久三年(一一九二)五月八日の後白河法皇四十九日の法会に当寺の僧三人が招請されている(同書)。同年八月九日、頼朝の妻北条政子の実朝出産に際し、安産の祈禱を行った寺社のなかに「国分寺(宮下)」とあり(同書)、国府が大住郡に移った時、当寺も一宮寒川神社(現高座郡寒川町)付近に移ったと推定される。

天正一九年(一五九二)一月日の徳川家康寺領寄進状写(相中留恩記略)に「寄進 薬師 相模国東郡国分之内式石」とある。寛永一〇年(一六三三)二月、幕府により、当寺は河原口の総持院の末寺となった。寛文年間(一六六一―一七三)住僧道麟が一切経建立を発願し、いろは歌を作り版木は昭和二九年焼失。諸方に勧進し、新造した経蔵に納めた。宝暦六年(一七五六)と推定される勧進帳(小山文書)に「相州国分寺村 東光山医王院 国分寺」とある。同一〇年七月の国分寺住職智宝願書案(総持院蔵)によれば、一時期無住であったため、先住の寛能の頃より寺地をめぐって近隣の農民との間に争論が起こった。このため智宝は朱印地および境内・寺格などにつき、確認を寺社奉行に願出ている。明治四年(一八七二)二月八日の資産調査には「高

式石、薬師領、相模国高座郡国分寺」とあり、茶畑畑・雑木山・寺敷地・笹山を合せて六千八百坪半の寺地と二

反二畝八歩の朱印地があった。大正一二年(一九三三)九月一日の関東大震災により本尊等が損傷。昭和二九年(一九五四)一月一日客殿焼失。同四六年現本堂建立。なお小田原市千代には東大寺式伽藍配置の古い寺の跡が発掘されており、国府にちなんだ地名もあることから、相模国分寺は最初千代に建立され、弘仁一〇年の火災の後、海老名に移ったという説もあり、今後の調査・研究により本項の記述に変更が必要となるかもしれない。

当寺蔵の正応五年(一二九二)一〇月六日の銘をもつ梵鐘は物部国光によって鑄造されたもので、国分寺から国分尼寺へ寄進されたもの。総高約一三九センチ、底部径約七一センチ、縁の厚さ約八センチ、国指定重要文化財。参道の側に樹齢一千二〇〇年と伝える周囲八メートル以上の大きな榎があり、県指定天然記念物。また境内には「尼の泣水」の供養碑がある。

#### 相模国分寺跡 ④海老名市国分

相模鉄道海老名駅の東方約五〇〇メートル、相模川東岸の標高三三メートルの台地上にある。畑の中に大きな礎石が点在し、中世以降国分寺の法灯を継ぐ寺が遺跡の南に現存すること、さらに薬師堂・国分寺跡とよばれる寺跡が付近に残っていること、さらにはこの付近の地名を国分と称することなどから、相模国分寺であろうと古くから推定されてきた。大正時代に法隆寺式伽藍配置をとる珍しい国分寺として学界に紹介され、論議が展開されてきた。

昭和四〇―四一年(一九六五―六六)の発掘調査によって、主要伽藍の詳細が明らかにされた。南大門の位置は確認できなかったが、塔は一辺三・四メートルの方形で壇上積基壇、講堂は金堂とまったく同じ規模の建物であることがわかった。回廊は南側で中門に取りつく単廊で、東側は二度にわたって造替えられている築地回廊である。塔と金堂をとりまく回廊は南北約一二〇メートル、東西約一六〇メートルと想定される。さらに講堂の北側には

東西に延びる僧坊と北方建物が存在することも確認されている。これらから、相模国分寺の伽藍は少なくとも一回の修理・増築の跡が認められ、さらに修造後に火災により焼失し再建されなかったことが判明した。しかし文献上の記述と発掘調査とを対比すると、今後検討を必要とする問題点を多く含んでいるといえる。しかしながら伽藍の規模は南北二五〇メートル以上となり、きわめて雄大な規模の寺が建立されていたことになる。

出土遺物としては、瓦類・青銅製の水煙・鉄釘・須恵器・土師器などである。これらの出土品から、当寺の築かれたのは奈良時代末から平安時代初期にかけてと想定される。国史跡。

#### 国分尼寺跡 ④海老名市国分

相模国分寺跡がある平坦な台地上、国分寺の北方約七〇〇メートルにある。寺域は県道杉久保一庫間線と小田急電鉄が交差する所の南側一帯と推定されている。天平一三年(七四二)の聖武天皇発願により、国ごとに国分寺とともに建立された尼寺の一つ。当寺の伽藍配置は奈良時代の代表的伽藍様式である大安寺式であることから、国分寺と異なり発願以降の建立であると考えられる。

「三代実録」元慶五年(八八二)一〇月三日条によれば、貞観一五年(八七三)七月二八日の太政官符により漢河寺(湧河寺)を国分尼寺としたが、元慶二年(九二二)九月二九日関東地方をおそった地震により堂舎が破壊されたため、同五年一〇月三日、相模国はもとの尼寺を国分尼寺としたいと申請し許可されている。「吾妻鏡」文治二年(一一八六)五月二九日条によれば、源頼朝は東海道諸国の国分尼寺などを修造するため、守護人にその破壊状態を注進させている。正応五年(一二九二)一〇月六日付の相模国分尼寺鐘銘(県史三)には「大日本国相州国分尼寺槌鐘 大檀那源季頼」とあり、海老名氏の一族国分季頼より梵鐘が寄進されている(国分寺蔵)。天正一八年(一五九〇)四月日の豊臣秀吉禁制写(県史三)に「東郡之内こくほ村国分仁寺」とあ

ヶ谷村に入り、望地・国分・上之郷の各村を通り河原口村の渡船場で相模川を厚木村に渡る。八王子道は大住郡田村(現平塚市)から相模川を高座郡二之宮村(現寒川町)に渡り、北上して倉見村(現同町)から門沢橋村に入り、中野・社家・中新田・河原口・上之郷・下今泉の各村を経て四谷村(現座間市)に抜ける。また大山道は用田村(現藤沢市)から本郷村に入り、門沢橋村から相模川を大住郡戸田村(現厚木市)に越える。文政一〇年(一八二七)に幕府によって設定された寄場組合村には市域の村はすべて深谷寄場組合に属している。

〔近現代〕 明治に入ると、初め神奈川府支配となり、のち府は県と改められた。明治四年(一八七二)寄場組合が廃止され、新たに戸籍区が設けられた。市域の村々はすべて二二区戸籍区に編入された。同六年の大区小区制では、市域は一九区と二〇区に分れた。同一七年国分・大谷・中新田・河原口・上郷・上今泉・下今泉・柏ヶ谷・望地の九ヶ村の連合戸長役場を国分に開き、同二二年の町村制の実施に伴いこれらの九ヶ村は合併し、海老名村となった。いっぽう榻漣(旧杉漣)・今里・社家・中野・門沢橋・上河内・中河内・本郷の八ヶ村は合併して有馬村となった。昭和一五年(一九四〇)海老名村は町制を布き、同三〇年有馬村を合併、同四六年市制を施行し、高座郡より分離した。鉄道は大正一五年(一九二六)相模鉄道(現国鉄相模線)が茅ヶ崎に通じ、同年神中鉄道が二俣川(現横浜市旭区)まで開通(同鉄道は昭和八年横浜駅まで開通、同一八年相模鉄道と合併)。昭和二年開通の小田急電鉄が北部を東北から西南に走っている。東南端を東海道新幹線が、中央部を東名高速道路が東西に通る。

日本歴史地名体系14-神奈川県 p457

き、宝永四年(一七〇七)富士山大噴火による砂降りのため、享保元年(一七一六)まで幕府直轄領となった。天保九年(一八三八)の相州青山往還宿々控帳(貞史九)によれば、当村は東海道戸塚宿(現横浜市戸塚区)へ加助郷を勤めており、矢倉沢往還の宿としては、東の下鶴間村(現大和市)まで二里、西は愛甲郡厚木村(現厚木市)まで一里の人馬の継立をしている。天保初期の家数一二五(風土記稿)。天保一一年の高八六五石余、家数一〇五(相模国寄場組合村高家数明細帳)〔史八付録〕。

清水寺は「しみずでら」ともいう。もとは宮寺湧河寺であったが建久五年(一九四)の修築の時、境内より清水が湧き出したため名を改められたと伝える。かつては国分尼寺の近くにあったが、元禄二年(一六八九)に現在の大松原山に移され、「水堂の観音様」とよばれ、多くの信者を集めている。現在は臨済宗建長寺派龍峰寺が管理している。本尊はいわゆる京都清水寺式の十一面千手観音立像で、鎌倉時代の作、国の重要文化財に指定。字宮台には樺の大木がある。樹高約二〇メートル、根回り約一五メートルあり、県の天然記念物に指定。昭和二年(一九二七)小田急電鉄の海老名国分駅が開設されたが、同一八年廃止となった。

国分寺 ②海老名市国分

相模川左岸用水と目久尻川に挟まれた標高約四〇メートルの台地上にある。東光山医王院と号し、高野山真言宗。本尊は葉師如来立像。左右に日光・月光二像および十二神将を置く。

天平一三年(七四二)の聖武天皇発願により、国ごとに国分尼寺とともに建立された寺の一つ。当寺は、他の国の国分寺と異なり、飛鳥時代の法隆寺式の伽藍配置で、白鳳期様式の瓦が出土すること、武蔵国分寺と異なり、郡名・郷名を刻印した瓦の出土が皆無であることなどから、すでに創建されていた土豪(壬生氏か)の氏寺に、七重塔一基と一丈六尺の釈迦仏金像を追加し、国分寺の寺格を満

国分村 ①海老名市国分・上今泉一丁目  
東は望地村・柏ヶ谷村、西は河原口村・上之郷村、南は上大谷村と早川村(現綾瀬市)、北は上今泉村と接している。村の中央を東西に矢倉沢往還が通じている。承久の乱に際して上洛した幕府軍のなかに「国分八郎相模」(吾妻鑑)がいる。当時千葉常胤の子胤道が国分を名乗っていたため、八郎に「相模」と注記したものであろう。当地の武士と思われる。永享一二年(一四四〇)結城合戦の折、上杉重方(憲実弟)が「国分」に陣をしいたと「鎌倉大草紙」は伝えている。この地であろうか。小田原衆所領役帳に、問宮豊前守「七拾七貫四百七拾文 東郡国分」とある。近世の支配は、幕府直轄領、春日局領、下総佐倉藩領、小田原藩領、再び佐倉藩領と替わるが、小田原藩領のと

海老名市

〔古代〕 大化改新以後に設けられた相模国の国府は、原則的に国府の近くに国分寺・国分尼寺があるべきとの考えから、海老名の国分に置かれたとする説が「風土記稿」以後有力であった。ただ現小田原市千代の千代廃寺付近を国府とする説もある。また「和名抄」に「国府在大住郡」とあり、この時期までに大住郡に移ったと考えられる。その理由は弘仁九年(八一八)七月の関東地方の大地震(類聚国史、翌年二月・八月両度の国分寺火災同書、あるいは元慶二年(八七八)九月二九日関東地方の大地震三代実録によるなどの説がある。天平一三年(七四二)諸国に国分寺・国分尼寺創建を命ずる聖武天皇の詔が出され、相模国では当市国分に建立されたと説かれてきた。しかし国分寺については、その伽藍配置が天平より古い法隆寺様式であること、また出土瓦などから、天平期以前に造られたこの地方の豪族の氏寺をあて、これに七重塔を建立して国分寺にしたとする説が有力になっている。しかし前記のごとく、弘仁一〇年の火災、元慶二年の大地震によって破壊炎上し、仏像は復旧したが「日本紀略」天慶三年一〇月二七日条、その後衰退の一途をたどることになる(↓国分寺)。

古代東海道は地域のほぼ中央を通っており、大谷字浜田は「延喜式」(兵部省)相模国駒馬の項に「浜田各十二疋」とある地とされる。古代条里の跡は当市のほとんど全域にわたり、北方座間市に及んでいる。しかも和銅年間(七〇八―七一五)の改定以前の古法である三〇〇歩(五

町)一里の基数に従って定められている。「海老名郷土誌」によると、条と里の区画は次のようになる。

〔条の区画〕 (一)一大縄 かつての大山道(青山道、矢倉沢往還)。渡辺畢山の「游相日記」に堤の長さ一八町とあるのはこの道である。現在の国道二四六号がこれにかかっている。(二)五大縄 西は中新田と河原口を界し、東は大谷・国分を界する経路。(三)中新田本村の大通り(東部一半は欠亡)。(四)中新田一本木より大谷に通ずる経路。(五)中新田より今里を経て大谷の清水に通ずる路線。(六)社家・今里・杉久保を連ねる経路(現在の東名高速道路が通る付近)。(七)百八堀通 中河内より社家に通ずる大道。(八)社家より中河内に通ずる経路。(九)中野より入内島を経て本郷に達する通路。(十)上郷より国分に達する通路。上郷龍昌院の南側より、国分尼寺に至る通路。(十一)下今泉字鶴松の北より国分に通ずる経路。(十二)下今泉に起こり、上今泉の八反田および杉本の間を通ずる経路。

〔里の区画〕 (一)明神大縄 往古は有鹿神社の参道がかかっていたといわれる。河原口より中新田に至って中断、再び社家より起こって門沢橋に通ずる路。(二)中大縄 上郷より中新田に至り中断、さらに社家より入内島を経て門沢橋に達する通路。(三)縦大縄 上郷字下鎌倉町より一大縄を横切り、河原口字三大縄荻野分に通ずる経路。(四)国分字押堀ヤハラ(北)の北にある経路。

この条里制によって開かれた古田を灌漑するための用水としてつくられたものが逆川用水路である。この用水の水源は現座間市の栗原に源をもつ目久尻川であるが、ここから平行に運河をつくり、これを国分の久仁保でV字形に北西方向に急転させ、今泉の地点で耕地へ放水して用水として使用したのである。この運河は目久尻川と反対方向に流れているためその名も逆川とよばれている。

〔中世〕 海老名氏は、村上源氏より出た武蔵横山党の後裔で、康平年間源四郎親季が相模守となってこの地に在住し、郷名によって海老名氏と称したといわれる(風土記

海老名市 456

日本歴史地名体系14-神奈川県-p456-1

稿)。とくにその孫の海老名源八季定は武勇にすぐれ、「保元物語」「曾我物語」にも語り伝えられている。季定には六人の男子があった。季久は宗家を継ぎ、能忠は依知(現厚木市)において本間氏を興し、有季は国分において国分氏を名乗り、季能は下海老名氏を名乗って播磨磨の地頭となり、俊重は荻野(現厚木市)において荻野氏を唱え、六男は僧侶となっている(小野系図、武蔵七党系図ほか)。海老名氏の居館跡は有鹿神社の南にあったとされる。遺跡はほとんどないが、御屋敷・矢倉という館に關連した名前が残る。史料には「下海老名郷」のみが出る。永享一〇年(一四三八)室町幕府の六代将軍足利義教と、関東公方足利持氏との間に戦乱が始まった。海老名尾張守入道および舎弟上野介は、持氏に仕えていた関係で海老名河原口の宝樹院(海老名道場)を本陣として戦ったが持氏は敗れ、海老名氏も滅亡した。海老名氏のほかに、この時期には糟屋氏がいる。「太平記」元弘三年(一二三三)五月の条に京都六波羅で糟屋三郎宗秋・同七郎が討死したとある。海老名氏と同じく武蔵横山党から出ている。その後当該地域は一時関東管領上杉氏の支配となったが、永正九年(一五一二)北条早雲によって制圧され、以後、同氏一族の玉繩城(現鎌倉市)城主北条氏の支配下に置かれた(↑大谷村・下大谷村)。

〔近世〕 江戸時代に入ると、海老名市域の村々は幕府直轄領・藩領・旗本領・社寺領が入り組む地域となった。前期は比較的幕府直轄領が多く、一部旗本領もある。前期の終り頃には下総佐倉・上野前橋・下総関宿などの藩領が多く現れるが、元禄一〇年(一六九七)頃からは「地方直し」によって旗本領が多くなるとともに、相給支配も増す。幕末には佐倉藩・下野烏山藩領が各二村、他はすべて旗本領で二村にわたるもの五氏、一村にかかわるもの二二氏であった。一藩または旗本一氏のみ支配が七村、二給が四、三給三、四給三。

街道は矢倉沢往還(青山道とも)が寺尾村(現綾瀬市)から柏

# 《海老名氏系図》

村上天皇 — 為平親王 — 源顯定 — 相模守 源有兼 — 海老名季兼

季貞(定)

上海老名  
季久 — 季綱 — 実綱

本間  
能忠 — 忠家 — 信忠

国分  
有季 — 季重 — 朝隆 — 季頼 — 季久

下海老名  
能季 — 家季 — 季茂

荻野  
季重 — 季景 — 惣庄 泰季 — 季通 — 季康 — 義季

浦分  
季直 — 通貞 — 知定 — 則貞

※『海老名市史 6 通史編 原子・古代・中世』・菱沼一憲著「中世海老名氏について(3)」『えびなの歴史海老名市史研究 第15号』・湯山学著「相模武士四」より抜粋・改編

海老名市温故館ミニ展示パンフレット

「海老名市参上」所収の系図

平成三〇年八月 海老名市教育委員会

公菴主、永享五年八月十三日と彫る、源、兵衛が事蹟考所なし、一は何人の碑なることを傳へずとのみ刻す、  
○安養院 稻荷山と號す、曹

洞宗 愛甲郡三田村清源院末 本尊彌陀を安ず、開山格雲存孝と云ふ  
寛永十一年正月 十四日寂す、  
△稻荷社 ○彌陀堂 村持、

○上郷村 加美加 宇牟良 江戸より十二里餘、海老名郷五村の一

なり 正保の改には上海老名村と載せ、元家數六十三、廣十二町許袤十一町 東、國分村、南、河原口村、北、上下今泉、四ッ谷三村、西、相模川を隔て愛甲郡金田、下依知二村、

上下今泉村を隔て相模川の岸に飛地あり、小名外記宿と云 本村を距こと十町、土人云、昔は今の相模川の西岸沙漠の所當村の地なりしに水溢に流失して、川瀬變りしより飛地となれり、檢地は天正十九年彦坂小刑部元正札す、今秋元忠右

衛門喬朝・森川鎌三郎・戸田靱負・高木富太郎一陽知行所なり 天正十八年高木主水正清秀に賜り、其子主水正止次、元和年中まで領し、寛文四年四月久世大和守廣之に賜り、元祿元年より同七年まで御料所、此年七月四給の先世、各自に賜ふと云ふ、街道二、東西に通ずるも

の矢倉澤道なり、南北に通ずるは八王子道なり 道幅各三間、

○高札場二 ○小名 △馬舟 末布 △中村 △宮畑ケ

△外記宿 飛地の小名なり、久能山より日光山へ御遷座の時、神柩跣躡の所と云、

○相模川 西界を流る 幅六十間許 堤あり 高六尺、堤上則八王子道なり、

○山王社 龍昌院持、○第六天社 河原口村惣持院持、  
○龍昌院 上郷山と號す、曹洞宗 河原口村本尊釋迦、開山能山雲元 元和六年六月廿四日卒、 △白山社 ○大光寺 月迎山と號す、天台宗、羽黒行人派修驗 日本橋西河岸 普門院配下、本尊大日

新編相模國風土記稿卷之六十五 村里部 高座郡卷之七

來に便す、

○有鹿阿利神社 式内郡中小社五座の一なり【延喜式神名帳】に高座郡

小五座、有鹿神社と見ゆ、鎮座の年代を傳へず、清和帝の御宇貞觀

十一年十一月神階を從五位上に進めらる【三代實錄】曰、貞觀十一年十

一月十九日壬申、授相模國社藏に永和の古縁起、天正の

續縁起あり共に見えず、古縁起に祭神は大日靈なり、天

平勝寶六年八月郷士藤原廣政と云者、夢兆に因て神祠

を修整す、同八年九月墾田五百町を、神供料に充られ

し由を載す、續縁起に天正三年四月別當總持院現住慶

雄夢中に神靈の告ありて神祠の東北池中に於て、石一

顆を覓得たり、此を神躰と崇奉すと云ふ社内にあり、淡

五寸周回九寸あり今海老名郷五村の總鎮守なり、祭禮年々四月八

日神輿を昇て、村北磯部村内勝坂二里を隔つと云所に到る、

此地に洞あり、有鹿谷と呼ぶ、爰に神輿を駐て神事を

修し六月十四日歸座するを例とす、別當は總持院なり

△鐘樓 元祿二年再鑄の鐘を掛く應永二十四年の古鐘ありしが、破裂すと云ふ、

△末社 諏訪 稻荷 山王合社 △碑 門前に立つ、當

國十三座之内有鹿神社と彫る、○天神社 村持下同じ

○神明宮 ○諏訪社 ○熊野社 ○石神社 ○第六天社

○總持院 海老山滿藏寺と號す、古義眞言宗京東寺寶本

尊虛空藏を安す有鹿神社の本、開山弘吽と云ふ緣起曰、天

平勝寶六年八月十二日、精舎草創之事、經三年而功畢、向請

弘吽大德而檢校精舎事既成大德名曰海老山滿藏寺總持院、斯

乃海老名邑、故名海老山、又所安置本尊、持如意寶藏而能滿

足一切之希願故名滿藏寺、又統一切之社務、故名總持院云々、

天正十九年十一月寺領十石の御朱印を賜ふ、【寺寶】

△東照宮御判物一通文祿中、名護屋御陣中に住僧 △谷

全阿彌奉書一通前と同時の書なり、文中爲御音信、從六箇

寺其指所、今考べからず、△岡江雪奉書一通天正五年萬部經修行中の

を押す、○宗珪寺 天王山と號す、曹洞宗小田原香、本尊

釋迦を置く、開山を壽翁嘉吉二年二月十五日寂す、中興を秀芳と云

ふ天正八年五月晦日寂す慶安二年八月寺領十二石の御朱印を賜ふ、

△鐘樓 鐘は元祿三年造る所なり、△牛頭天王社 ○寶

樹寺 大章山觀音院と號す總持院末、本尊千手觀音を安す、

開山慶韻と云ふ永正元年寂すと云ふ、按ずるに、有鹿神社緣

應永二十三冬、大略成功、寶樹者、即當郷寶樹寺開基

施主云々と見ゆ、是によれば慶韻は中興の僧なるべし、慶安

二年八月寺領七石の御朱印を賜ふ、△古碑二基 小丘

の上碑面にに在り、其一是源八兵衛が墳墓なりと云ふ

# 新編相模國風土記稿卷六十五之

## 村里部 高座郡卷之七

### 澁谷庄

○河原口村 加波良久 知牟良

海老名郷と唱ふ、海老名の地名舊く

は康平年間奥州の役、伊豫守頼義の屬將に海老名源四郎親季源平戦争の間、海老名源八季定等あり、其頃此地に住して在名を稱せしなるべし、其後應永の頃は此郷を上下に分ちしと見え、鶴岡八幡神社、大伴氏所藏文書に下

海老名郷と記せり 曰、鶴岡八幡宮末社三島神主申、當國下海老名郷領家職事、任去月廿六日御補任狀、

並同日遵行之御奉書等之旨、可沙汰付下地於神主山城守時速之狀如件、應永九年十一月七日、岡豊後守殿、沙彌華押、按ずる

に、今郷中上郷村、古は上海老名村と稱す、又近隣門、永享亂の澤橋村を海老名下郷と號す、是等其頃の遺稱ならん、永享亂の

時は持氏此地に在陣せし事、【東亂記】に見えたり 曰、永享十年

十一月二日、持氏海老名より歸らせ給ふ、又築波大夫潤朝、享德四年二月の軍忠書上に、亡父兼朝并親類等、去永享十年八月十五日、武州府中御發向、令供奉、其後海老名御陣江參從云々、北條氏割據の頃は山中内匠

助・山中孫七郎知行す 【役帳】曰、山中内匠助二百六十八貫四

百二十三貫、海老名此内百五十貫文、役出錢も同前、當村江戸より十五文、海老名此内百五十貫、役出錢も同前、

四里、民戸六十三、東西十三町餘南北九町許 東、國分。大谷二村、南、

中新田村、北、上郷村、西、愛甲郡厚木、金田二村、天正十九年彦坂小刑部元正檢地し

元祿十一年更に地頭の檢地あり、今松平八十郎勘英 先世美濃

守重良に 先世忠兵衛晶 三枝雲平 先世日向守守儀に賜

賜へり、辻忠兵衛昭賜はれり、以上三給は元祿十一年に拜賜

永田與左衛門正邦 元祿十一年天野源内に賜ひ山城守が時收公ありて御料

となり、文化中に至て正邦が父、備後守正道が加恩の地となり、當村寛文の頃迄御料にして、同十一年小濱民部が采地とな

り、貞享三年御料に復し、元祿四年牧野備後守に賜ひ、等が采同十一年再御料となり、同年四給に裂賜へりと云ふ、

邑なり、相模川に傍ひて流作場あり、延享二年神尾若狹守春英寛政六年大貫次右衛門光豊、檢地して御料に屬す

往還村の東西に貫くもの、矢倉澤道なり、西北に係れるものは八王子道なり 幅各三間

○高札場四 ○小名 △坊中 婆宇知宇 △名古屋澤 奈古左波 △宿

○相模川 西界を流る 幅一町許、河原を合堤あり 高六尺、 ○渡

船場 相模川にあり、矢倉澤道の係る所、對岸は厚木村なり、當村及厚木、中新田三村の持船五艘を置いて往